

論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第 8 条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

フリガナ 氏名 (姓、名)	トモノ タカオ 伴野 崇生	授与番号 甲 1743 号
学位の種類	博士(人間科学)	授与年月日 2024 年 3 月 31 日
学位授与の要件	本学学位規程第 18 条第 1 項該当者 [学位規則第 4 条第 1 項]	
博士論文の題名	「難民等」への日本語教育人材養成の現状と課題 ——モードの往還による知識生産	
審査委員	(主査) サトウ タツヤ (立命館大学総合心理学部教授)	安田 裕子 (立命館大学総合心理学部教授)
	杉原 由美 (慶應義塾大学総合政策学部准教授)	
論文内容の要旨	<p>【論文の構成】 本論文は、全 6 章から構成される。序論にあたるのが第 1 章と第 2 章である。第 1 章で背景と目的、研究設問を提示した上で、第 2 章で難民日本語教育の現状と課題について整理している。第 3 章から第 5 章が本論である。まず、第 3 章では、難民日本語教育という領域をなぜ立ち上げる必要があるのか。また、それはどのような領域であるのかについて検討している。また、第 4 章では申請者自身を対象に、難民日本語教育人材になっていく過程を支えるには何が必要か検討し、モデル生成を試みている。さらに、第 5 章では、難民日本語教育人材は研修プログラムで養成可能か、可能であるとすれば研修プログラムを通じて受講者はどのような資質・能力を得ることができるか検討している。その上で、第 6 章で「本論文の結論と残された課題」について提示し論文を締め括っている。</p> <p>【論文内容の要旨】 本論文は、難民等を対象とした日本語教育、難民支援としての日本語教育人材の養成はなぜ必要か、またそれはいかにして可能となるかについて論じたものである。 まず、歴史的経緯や現状、先行研究における課題を整理した上で、難民条約の定義及び文化庁の記述から、難民=学習者の特殊性と難民性への配慮の必要性に関する論点を抽出している。また、難民に対する日本語教育/難民支援としての日本語教育領域を「難民日本語教育」と呼ぶことを提案し、ギボンズ(Gibbons, M.)らのモード論を補助線にこれが日本語教育の一領域(モード I)であり隣接領域との学際的な(interdisciplinary)領域を形成するだけでなく、難民/難民支援に関わる他の領域との学融的な(transdisciplinary)領域(モード II)を形成できること、そしてそのように捉えることの有用性について主張している。 また、申請者自身の難民日本語教育の経験を対象に分析を行い、今後の人材養成や振り返りに活用できるモデル生成を試みている。生成したモデルから申請者は、迷い・戸惑いが成長の契機になると同時に、自信喪失や思考停止にもつながりかねないことを指摘し、成長へとつながる良質な葛藤こそ重要であることを指摘している。さらに、申請者自身が関わった研修を対象に質的統合法による分析を行い、研修受講者らが(研修実施側が研修受講前に設定した到達目標よりも)深く豊かな観点を得ることができていたことを示しつつ、日本語教育人材の養成がいかにして可能となるかについて事例を通じて示し、それぞれ異なる様々な学範的(disciplinary)背景を持った人々から学べる体制を提供することの重要性についても指摘している。</p>	

論文審査の結果の要旨	<p>【論文の特徴】</p> <p>本論文の特徴はまず、世界と日本における難民の歴史的経緯を踏まえた上で、現状と課題の把握を行った上で実践への視点を持っている点にある。世界と日本という面的広がり と歴史という時間軸の中で現在を捉えることで、日本の難民支援がまさに転換期にあることを明確にしている。</p> <p>また、モード論を援用して難民日本語教育を捉えることで、難民日本語教育が難民の特殊性という対象者に関する特殊性を抱えているのみならず、学際的(interdisciplinary)かつ学融的(transdisciplinary)という領域における特殊性を有していることを描くことに成功している。難民日本語教育という領域設定に際して、モード I(学範内好奇心駆動型)かモード II(社会関心駆動型)について単に対立するものとして捉えるのではなく、モード Iでありかつモード II、さらにはモード IIにおいて生じ得る軋轢・葛藤を乗り越えるためのさらにより高次のモード I を措定している点も特徴的である。</p> <p>さらに、申請者自身の難民日本語教育経験を分析するにあたって、複線径路等至性モデリング(Trajectory Equifinality Modeling: TEM)による分析にあたって、自己を対象に行う Auto-TEM に対話的自己のコンフィギュレーション分析を組み合わせ用いている点もこの論文の特徴である。これにより、Auto-TEM だけでは捉えることのできなかった様々な自己の統合という観点を得ることに成功している。</p> <p>最後に、理論的な研究や分析に留まらず、実際に人材育成プログラムを開発・実施・評価している点も特徴的である。様々な学範的な(disciplinary)背景を持った人々を通じてそれぞれのモード I 的な視点をモード II 的なものへと融合していくという視点は従来のモード論では十分に扱われてこなかった視点であると言えるだろう。</p> <p>【論文の評価】</p> <p>公聴会では、申請者による論文要旨の説明の後、審査委員は申請者に対する口頭試問を行った。</p> <p>審査委員からは、現場の実践者の経験を凝縮して難民日本語教育の人材育成モデルを提示したことは評価できるという指摘がなされた。一方で、申請者自身の経験を俯瞰統合するという意味が分かりにくい、日本のいわばローカルな実践が難民の多い地域の言語教育にどのような貢献ができるのかについての説明がもう少しあっても良かったのではないかという指摘があった。これらに対して申請者からは質的研究法 TEM の概念ツールを用いることで個人に対する社会的な諸力を描くことができること、そのモデルがそれぞれローカルに行われている難民言語教育への示唆になることが回答された。</p> <p>審査委員 3 名は、本論文について「難民日本語教育人材養成はいかにして可能となるか」という研究設問をたてたうえで、幅広い文献的検討、難民日本語教育に従事した申請者自身の経験の分析、申請者が関与した組織における教育カリキュラムの批判的検討を通して答える形になっていることとその扱う内容は大いに評価できるという意見で一致した。</p> <p>以上により、審査委員会は一致して、本論文は本研究科の博士学位論文審査基準を満たしており、博士学位を授与するに相応しいものと判断した。</p>
試験または学力確認の結果の要旨	<p>本論文の公聴会は 2024 年 1 月 6 日 (土) 15:00~16:00、立命館大学大阪いばらきキャンパス B 棟 374 コロキウムおよび ZOOM によるオンラインで行われ、質疑応答を中心にした論文審査を行った。</p> <p>審査委員会は、論文審査を中心に本学大学院人間科学研究科博士課程後期課程の在学期間中における申請者の学会発表など様々な研究活動、また公聴会の質疑応答を通して、博士学位にふさわしい能力を有することを確認した。</p> <p>なお本論文に関わり、申請者は『社会構想研究』『難民研究ジャーナル』に査読付き論文を掲載するなど、博士論文提出要件を満たしていることを確認した。</p> <p>以上より本学学位規定第 18 条第 1 項に基づいて、申請者に博士(人間科学 立命館大学)の学位を授与することが適当であると判断する。</p>

